会　議　録

１　会議名

令和６年度　第７回和田区地域協議会

２　議題（公開・非公開の別）

自主的な審議（公開）

（１）勉強会「和田区の沿革、地域の特性について」

（２）自主的な審議の進め方について

３　開催日時

令和６年１２月１８日（水）　午後６時３０分から午後７時３９分まで

４　開催場所

ラーバンセンター　第４研修室

５　傍聴人の数

０人

６　非公開の理由

―

７　出席した者（傍聴人を除く）氏名

・委　員：秋山会長、近藤（浩）委員、近藤（美）委員、角谷委員、髙橋委員、西片委員、西田委員、牧田委員、山岸委員、渡邉委員（欠席４人）

・意見交換アドバイザー：斉川氏

・事務局：南部まちづくりセンター　大島所長、小池副所長、石黒係長

８　発言の内容

【石黒係長】

・阿部委員、泉委員、齊藤委員、横田委員を除く１０人の出席があり、上越市地域自治区の設置に関する条例第８条第２項の規定により、委員の半数以上の出席を確認、会議の成立を報告

・同条例第８条第１項の規定により、議長は会長が務めることを報告

【秋山会長】

・会議の開会を宣言

・会議録の確認：西片委員に依頼

― 次第２　自主的な審議（１）勉強会「和田区の沿革、地域の特性について」 ―

【秋山会長】

次第２　自主的な審議（１）勉強会「和田区の沿革、地域の特性について」に入る。

本日は、平成３０年に発行された「和田のあゆみ」の編集委員で、大和郷土史研究家の斉川さんをお招きしています。第５期地域協議会委員には、ほかの地域から移住してきた委員も多くいらっしゃるので、まずは和田区の歴史的な背景や地域の特性について共通認識を持とうということで、斉川さんから和田区の沿革や地域の特性についてお話しを伺いたいと思います。

【斉川氏】

和田村の歴史と成立について話してほしいという依頼を受けて、資料を当日配布資料№.１のとおりまとめた。

まず、和田に多いのは新田である。新田という地名はどういう由来があるのかというと、越後騒動の後１６８１年に松平光長が改易された後に幕府で検地を行った際、上杉の時代にはなかった村が全て新田と名付けられている。新田と付く地名は、上杉の時代にはなかったと思って差し支えない。島田や木島は新田と付かないので、上杉の時代にはあったんだなとか、そういうことがわかる。

和田では大字というのは、川をまたがない。川をまたぐのは、後から川ができたということである。現在妙高市の広島には、向こう広島とこっちの広島があり、真ん中に川が流れている。ということは、関川が広島を分断してつけかえられたと理解できる。矢代川で言うと、代表的なのが七ヶ所である。七ヶ所は川で西と東に分かれている。もともと川は中箱井への土手に沿って流れていたと思っていただいていいが、そこに今泉新川を直線化したら、七ヶ所が川の東と西に分かれてしまった。大字は川をまたぐことはないので、もし分かれていたらそれは川が横切ったというふうに見てもいただいていい。

先ほどの広島は、向こう広島がある。昔は木島を流れていたのを広島に通したの

で、その結果木島は広大な田んぼになって一気に木島の石高が増えた。そのように小栗美作の時代、小栗美作は越後騒動などで悪者になっているが、田んぼを一気に増やしたのが光長の時代というふうに言われている。

もともと和田というのは、寺町から石沢に入る、現在たこ焼き店がある辺りから地面がぐっと下がっているが、あれは妙高の火砕流があそこまで流れて来たものである。ああいう段丘は川の段丘になるのだが、あそこは東西に川が流れたことはないので、歴史的には火砕流があそこまで流れてきていて、あのような地形になっている。

火砕流が来ているので、矢代川はほとんど伏流水である。新井に向かって矢代川を見ると、石ころがゴロゴロしていてあまり水が流れていないが、西田中の辺りまで来ると伏流水がどっと出ている。寺町の横をずっと行くと、西田中の辺りまでずっと火砕流の跡があり、あの辺から伏流水があふれている。稲荷の辺りにくると結構、水が豊かだが、あの辺から噴き出している。

今の瀬渡橋に橋ができたのは江戸時代の１８００年代だと思うが、その前までは浅瀬をポンポンと渡っていた。橋ができたのは幕末くらいである。言い伝えでは、坊主が困っていたら蛇が来て背中を渡れと言ったというが、もともとあの辺は浅瀬が多かったようである。水が多いときは渡し船などで渡っていたという。

資料の２ページに和田村の誕生と書いてあるが、例えば、黒田の場合は地域を治めた人者の名前が地名になったと言われるが、和田についてはそのような歴史的な事実はない。田んぼの中に和して住もうというような由来で、要するに和田には田のつく地名が結構多いことから、田んぼの中で和して暮らそうということで村名に田のつく村が多かったことから、瑞々しい稲穂が波打つ田の中に、村民が相和してという理想の下に名付けられたらしい。

次に、歴代の和田村長について、初代の金子伊太郎というのは結構有名な人で、矢代川の源流まで歩いて探索したりいろいろ活躍された。柳井田出身の方で、柳井田の国道１８号線の少し手前の右側に金子伊太郎の碑という結構立派な碑がある。しかし、実質的には初代は鈴木文太で和田村長を決める選挙管理委員会の委員長のようなことをやられた。委員長が村長が決まる前の選考委員会の会長のような形で

やられたので、初代は鈴木文太とする本もある。

昭和 29 年に古賀と栗原と柳田と月岡が新井町と合併し、これは早い話、新井町が市になるには人数の要件があるため、それでこの四つの村を欲しいということで、地域の人たちが新井に行きたいと手を上げた訳ではなく、行政上の都合で和田から離れた。そして残った人たちが高田に入って高田市になった。

１ページの下、和田の近世について、大崎郷、上板倉郷、下板倉郷、これは関川の東と西である。大崎郷というのは関川の西である。新田村というのは、掘検地の時、要するに上杉から引き継ぐために検地を行ったのだが、その時には存在していなくて、光長の後に検地を行った際にあった村を新田村、堀検地の時の新田を新田村というわけにいかないので古新田、この代表的な名前に新保古新田がある。今名前として残っているのはあそこくらいしかないのではないか。だから、新保古新田というのは堀検地の時の新田なので歴史が長い。

【秋山会長】

私が１番知りたかったのは、地域協議会の中で、今の和田区をふかんしてみた時に、川で分断までいかないが、和田地区と今人口が増えつつある上越妙高駅周辺の大和地区があり、両者で歴史的な背景が異なるのかなと感じていた。特に和田地区のほうは、すごく歴史が深い地域なのかと感じられて、ほかとは違う特性のようなものがあるような気がしていた。

【斉川氏】

和田は、近世では関川の西側は大崎郷、向こうは板倉郷で分かれていたが、その後、大崎郷、上板倉郷、下板倉郷に分かれて、大崎郷の高田新田村、荒町村、脇野田村、今泉村、土合村、七ケ所新田村が大和村になった。田中とか石沢とか柳井田などが大倉村になって、大倉村は大崎郷と板倉郷が半分ずつ一緒になったので、そういう名前になったというふうに言われている。

【秋山会長】

今、本当にざっくりとお話いただいたが、せっかくの機会なので質問はないか。

大和神社があって、大和１から６丁目まであるが、大和の地名はどこから来た

のか。

【斉川氏】

大和村の地名の由来は調べているが出てこない。これがまた不思議だが、いつから大和と言い出したのかというのが、いろいろ調べているが出てこない。明治２２年に市制・町村制が施行された時、高田新田、荒町、脇野田、今泉、土合、七ケ所の六つの村が大和村になったのだが、大学の先生からも時々、何で大和なのか、歴史的にいわれがあるのかと質問されることがあるが、歴史的なものはない。ただ大和とつけたのではないか。私が若い頃、お年寄りから昔から大和と言っていたと聞いたこともある。高田市史や上越市史などでも、特に高田市史には和田村のことは全く出てこない。高田市内のことだけである。上越市史になるとポツポツと出てくるが、深掘りしてまでは出てこない。だから、和田の歴史というのが、特に「新田」が圧倒的に多いので、上杉時代の資料にもほとんど和田は出てこない。特に和田地区のほうは新田ばかりである。

ただ、いろいろあって、例えば、寺町は、何で寺町なのかというと、一説には鮫ヶ尾城の下にある摩尼王寺という寺院が七堂伽藍（がらん）で、その門前町が寺町だと言われている。寺町には神明宮があるが、そこの神主は朝日の熊野神社の神主で、どうして寺町の神社の神主をやっているのかよくわからないが、寺町は板倉の丈ヶ山の山寺薬師の遥拝所だったと言われている。だから、登る人はあそこから登る、年を取った人は寺町まで行って遥拝所から山寺薬師のほうに向かって礼拝する。そういう場所も寺町にはあったと伝えられている。面白いのは、朝日の熊野神社と山寺を線で結ぶと寺町はちょうど真ん中に位置する。誰に聞いてもそんなの知らなかったという人ばかりだが、誰かご存じの方がいたら教えていただきたいと思うくらいである。

寺町に山寺の遥拝所があったというのは確かなようである。ただ、神主の熊野神社は伊勢熊野ではなく出雲熊野であり、出雲熊野のほうが数段古いことから、どうして出雲熊野なのかということもよくわからない。神主本人に聞いても、昔からそうだみたいな感じでよくわからない。熊野も出雲と和歌山があるではないかと言われるが、出雲熊野である。出雲熊野のほうが歴史的には数段古いので、同じ頃に出

雲から分かれたのかなという気もしないではない。神社のある朝日は、源平のときに朝日将軍が関西に上る時にそこで休憩したというので、朝日という地名がついたと言われている。

【角谷委員】

最初の説明の中で火砕流とおっしゃったが、焼山とか妙高山のものなのか。

【斉川氏】

妙高山である。あれは寺町まで来ている。

【角谷委員】

地形的なことを言うと、この辺に田んぼなどができたのは地盤がよかったのか。

【斉川氏】

６０００メートル掘っても岩盤がないというくらい悪い。

【角谷委員】

新津に住んでいた頃に新潟市はずぶずぶしている潟ばかりだから、国鉄は線路を引くときに新津のほうを通したという話を聞いたが、どこを通してもよかったのか。

【斉川氏】

１万年、２万年前の話である。

信濃川はその当時上越に流れ込んでいた。

【角谷委員】

もっと小さかったのか。

【斉川氏】

いや、大きかった。関田山脈が隆起したのと妙高の火山の噴火で信濃川がせき止められて、それで信濃川は十日町を回った。だから、昔は上越の中にも流れていた。関川を掘ると信濃の岩石が出るのでそうなのだろうと今の学説では言っている。

【近藤（浩）委員】

和田村が存続したのがざっと計算して約５０年。その時に、石沢に和田村役場があったと書いてある。当時その近辺はかなりにぎわったものか。

【斉川氏】

江戸時代は、川止めがあったり、茶屋町には茶屋がたくさんあった。江戸から来

るときには、石沢で川止めをやると石沢も結構賑わいがあったりする。そういう意味では、茶屋町と石沢は橋ができる前は賑わったのだろうと思われる。

【近藤（浩）委員】

昭和２９年、３０年に和田村がバラバラになって、新井市や高田市に入って和田村の歴史が終わるわけだが、最大で和田村の人口はどれぐらいあって、中頸城の地域の中ではどういう位置付けだったのか。

【斉川氏】

地域の中での位置付けは、ほとんどないのではないか。新潟県の歴史などには出てこない。先ほど言った新田ばかりで歴史的には上杉の時代にはほとんど沼地で、そこが全部田んぼになったのは江戸の光長の時代である。光長が越後騒動で改易になった後に行った検地で田んぼがたくさん出てきた。和田は新田だらけということは、上杉の時代は、ほとんど沼地とか、特に寺町の火砕流でぐっと下がっている所から湿地帯だったと思われる。その上には縄文とか弥生の遺跡があるが、寺町の下には遺跡は何もない。

今の寺町、石沢に旧北国街道があって、一時柳井田と石沢の間に矢代川が流れたことがある。今は川に土手があるのは当たり前になっているが、土手はもともと河岸段丘が洪水の度にだんだん高くなってそこが土手になった。長い間かけて土手になったというわけだから、昔は水任せで歴史を見ても矢代川に土手の工事をやったというようなことは全く出てこない。ほとんど河岸段丘で、洪水の後で水が引くとそこに泥が溜まって、それがだんだん高くなって、１００年に１度の洪水になると１００年間は土手の下という話になる。土手がないと川は勝手に流れるので、昔は矢代川は石沢の南を流れたりあちこち流れて、だんだん今の位置に落ち着いた。もともと矢代川は今の上越妙高駅の辺りから願清寺のほうに流れていた。もともと石沢と田中の間からずっといって、和田小学校の辺りから回って、中箱井の土手の下へ行って、土合の先へ流れていた。荒町の際をずっと流れていったのを小栗美作の時代に今泉新川といってまっすぐに切った。要するに、高田城下が洪水で今の乗国寺のあたりで回っていたが、下新田のほうに切り直した。そのあと、何度か流れを変えているが、今の流れになったのはそんなに古い時代ではない。

石沢に真っすぐな道路がある。旧道ではなくて瀬渡橋を渡って真っすぐになっている。あれは陸軍が関山演習場に行く時に狭い旧道を戦車で通れないというので新しく軍用道路を作ったもので、だから真っすぐである。陸軍の道は曲がってはいけない。いざという時に飛行機も降りられるような規格で作られた。

【秋山会長】

それでは、勉強会のほうはそろそろ閉じさせていただきたいと思う。私の感想だが、和田地区の歴史の拠り所となるような話が出てほしいと思ったが、関川、八代川は結構水任せで、それがもっと古くさかのぼるとそういう状態だったということが少しがっかりした部分ではあるが、それでも水との縁はすごく濃いのだと感じた。

３ページの和田の村名のところで、田の中に和してというところから名付けられたというのは初めて伺った部分である。

もう一つは、現状の妙高市との境に和田区があって、その時々の都合で分けられているが、そこを取り払うと妙高市の旧和田村だったところとの繋がりがすごく深いと感じた。

【斉川氏】

今考えると、妙高になった所が結構賑わっている。だから、上越妙高駅があって、新幹線が通って、昔の和田村のエリアがずっとあれば、今の高速のインター線まで和田村だから、結構和田村だけで食べていけたのではないかという気もしないではない。

【秋山会長】

私も同感である。昔の和田村があれば、上越妙高駅はもしかしたら妙高市になっていたかもしれないのだなというところに、和田区が立地しているということだと思う。

【斉川氏】

和田区には大和地区と和田地区があると思うが、和田地区をどうするのか、どうしたら活性化できるかを真剣に考えていかないと、和田小学校も一部複式学級になっているし、和田保育園も風前の灯だし、人口もどんどん減っているし、どうなってしまうのだろうと思う。上越妙高のほうばかり輝いて少し気になっている。そう

いうことを地域協議会でどう論議されているのか興味がある。

【秋山会長】

委員には和田地区の皆さんと大和地区の皆さんがいる。どうしても最近人口が増えて注目される駅がある所に関心がいってしまうが、そこばかりではなくて、私たちは地域全体を知りたいということでお話を伺ったこともあるので、また今後、勉強を深めたり、和田地区の人たちの話も聞いたりしながら考えていきたいと思う。

事前にもう少しこのテーマでと絞ってお願いしておけば話しやすかったと反省している。すごく大きな切り口で依頼をしたが、やりとりもさせていただいて助かった。では、これで勉強会を終わらせていただく。

【斉川氏】

皆さんの要望にこたえ切れたのかどうか全く自信がないが、大和地区は放っていても大丈夫。和田地区をどうしたらよいか考えて、何か方針が出れば応援していきたいと思っている。今の和田小学校の現状などを見ていると、何とかしないといけない。ぜひ、地域協議会の皆さんに頑張っていただきたい。

【秋山会長】

以上で、次第２　自主的な審議（１）勉強会　和田区の沿革、地域の特性についてを終了する。

（斉川氏退室）

― 次第２　自主的な審議（２）自主的な審議の進め方について ―

【秋山会長】

次第２　自主的な審議（２）自主的な審議の進め方についてに入る。

これまで地域の課題や活性化のアイデアについて話し合ってきたが、なかなか絞り切れない状況が続いている。また、アイデアを絞った次の段階でも誰が実行するのかという問題があり、地域協議会は市の諮問機関であって実働部隊にはなれないので難航することが見込まれる。そこで、今回は角度を変えて、市の補助制度、地域独自の予算事業の活用の面から話し合いたいと思う。

まずは、市の補助制度について、事務局から説明を求める。

【石黒係長】

・資料№.１により説明

【秋山会長】

これまでの話し合いの中で、運動会をみんなで盛り上げていくやり方や防災士会の和田支部をどんなふうに働きかけていったら繋がるかというような話題も出た。そういう団体ができたり、動きがあると地域独自の予算事業の補助対象とすることもできるということ、さらにほかの地域の事例を見るといろいろヒントをいただく部分がある。この補助金の活用を促進することで、地域の活性化や課題解決を図っていく、そんな方向からも考えてみることができるかと思っている。

ほかの区の事例も見ながら、この補助金の活用が見込める和田区の団体やその団体に対してこういう提案ができないかというようなことを考えていきたい。例えば、先日、三郷区の方と交流したときに、この地域独自の予算事業を利用して三郷夏祭りをやっていると伺った。本当に小さなサークル的な活動だが、団体名をつけて補助制度を利用して継続してやっていくような取組をしているという話もあったので、実際に活用して動いている地域の関係者を招いて勉強会をするというようなこともできるかと思う。

和田区では令和６年度は２件で５７万８，０００円と利用は低調だが、こういうことができるのではないかというような提案があればいただきたい。急に言われても難しいかと思うので、次回１月の地域協議会にまでに考えてきていただいて、次の地域協議会でそれぞれ発表していただくというような方法をとらせていただきたいと思うがいかがか。

牧田委員、運動会の活性化について提案をいただいた中で、あまり補助金ねらいで団体を作って働きかけをするのも、どうかというのはあるが。

【牧田委員】

私たちが今宿題で与えられた内容は、その実施団体を想定した上でこういった事業をしていけるのではないかというところまで考えるということか。

【秋山会長】

そうなるかと思うが、この補助事業のことは置いておいて考えるのも一つの手立てだと思う。補助金を目的とすると、かなり縛りがきつくなるし、負担感も出てくるという一面もあるかと思う。

【石黒係長】

今ほどの運動会の例だと、新たに団体を見つけるとかではなくて、すでに、運営されている体協の組織があるので、そちらが主体となってやっていただく中で事業費に補助金を活用することが考えられる。

【秋山会長】

そのような働きかけをしてみたらどうかということである。これまで提案いただいたアイデアも含めて、具体的にやっていくのに何かヒントにならないかというような提案であった。ほかの区でどんな活用をしているか見て、その感想をいただくのでもよいかと思うので、少しだけ視点をここに向けて読み込んでいただき、あわせて私たちのアイデアの一覧を見ていただいて、次回の地域協議会までに考えていただければと思う。

どのような進め方をするかを正副会長と事務局で整理して、次回までにご案内させていただきたいと思う。

以上で、次第２　自主的な審議（２）自主的な審議の進め方についてを終了する。

― 次第３　事務連絡 ―

【秋山会長】

次第３　事務連絡に入る。

事務局より説明を求める。

【小池副所長】

・今後の地域協議会の日程連絡

令和６年度 第８回地域協議会：１月２２日（水）１８：３０から

第９回地域協議会：２月１９日（水）１８：３０から

会場：ラーバンセンター第４研修室

【秋山会長】

・ただ今の説明について質問を求めるがなし

・会議の閉会を宣言

９　問合せ先

総合政策部　地域政策課　南部まちづくりセンター

TEL　：０２５－５２２－８８３１（直通）

E-mail：nanbu-machi@city.joetsu.lg.jp

１０　その他

別添の会議資料もあわせて御覧ください。